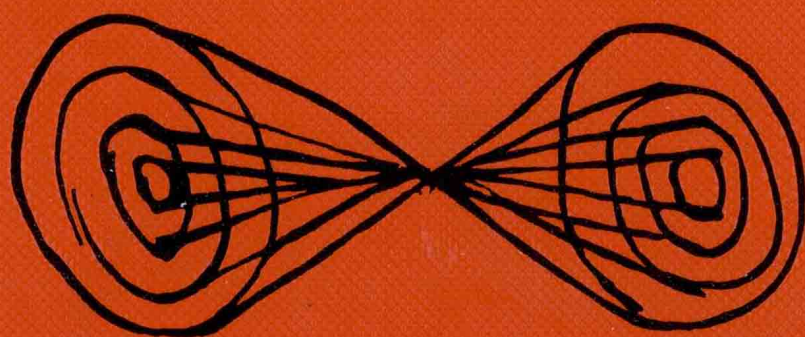




島崎藤村集
(二)

近代日本文学 9

島崎藤村集(二)

昭和五十四年三月三十日 発行

著者 島崎藤村
しまざきとうそん

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話 東京二九一―七六五(営業)
二九四―六七(編集)
振替口座 東京六一四一二三番
郵便番号 一〇一―一九一

印刷 株式会社 精興社
製本 株式会社 鈴木製本所
装幀 庫田 毅

島崎藤村集(二) 目次

夜明け前

第一部 五

第二部 二三〇

『夜明け前』論（青野季吉） 四五六

島崎藤村集
(二)

夜明け前

第一部

序の章

一

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨^{さか}づたひに行く崖の道であり、あるところは數十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてゐた。

東ざかひの櫻澤から、西の十曲峠まで、木曾十一宿はこの街道に添うて、二十二里餘に亙る長い谿谷の間に散在してゐた。道路の位置も幾度か改まつたもので、古道はいつの間にか深い山間に埋れた。名高い棧^{いし}も、葛^{つづみ}のかづらを頼みにしたやうな危い場處ではなくなつて、徳川時代の末には既に渡ることの出来る橋であつた。新規に／＼と出来た道はだん／＼谷の下の方の

位置へと降つて来た。道の狭いところには、木を伐つて並べ、藤づるでからめ、それで街道の狭いのを補つた。長い間にこの木曾路に起つて来た變化は、いくらかづつでも峻^{たけな}な山坂の多いところを歩きよくした。そのかはり、大雨ごとによつて来る河水の氾濫が旅行を困難にする。その度に旅人は最寄り／＼の宿場に逗留して、道路の開通を待つこともめづらしくない。

この街道の變遷は幾世紀に亙る封建時代の發達をも、その制度組織の用心深さをも語つてゐた。鐵砲を改め女を改めるほど旅行者の取締りを嚴重にした時代に、これほど好い要害の地勢もないからである。この谿谷の最も深いところには木曾福島^{きよふく}の關所も隠れてゐた。

東山道とも言ひ、木曾街道六十九次とも言つた驛路の一部がこゝだ。この道は東は板橋を経て江戸に續き、西は大阪を経て京都にまで續いて行つてゐる。東海道方面を廻らないほどの旅人は、否でも應でもこの道を踏まねばならぬ。一里毎に塚を築き、櫻を植えて、里程を知るとよりとした昔は、旅人はいづれも道中記をふところにして、宿場から宿場へとかゝりながら、この街道筋を往來した。

馬籠^{うまろう}は木曾十一宿の一つで、この長い谿谷の盡きたところにある。西よりする木曾路の最初の入口にあたる。そこは美濃境にも近い。美濃方面から十曲峠に添うて、曲りくねつた山坂を攀ぢ登つて来るものは、高い峠の上の位置にこの宿を見つける。街道の兩側には一段づつ石垣を築いてその上に民家を建てたやうなところで、

風雪を凌ぐための石を載せた板屋根がその左右に並んでゐる。宿場らしい高札の立つところを中心に、本陣、問屋、年寄、傳馬役、定歩行役、水役、七里役（飛脚）などより成る百軒ばかりの家々が主な部分で、まだその他に宿内の控へとなつてゐる小名の家数を加へると六十軒ばかりの民家を數へる。荒町、みつや、横手、中のかや、岩田、峠などの部落がそれだ。その宿はづれでは狸の膏藥を賣る。名物栗こはめしの看板を軒に掛けて、往來の客を待つ御休處もある。山の中とは言ひながら、廣い空は惠那山の麓の方にひらけて、美濃の平野を望むことの出来るやうな位置にもある。何となく西の空氣も通つて来るやうなところだ。

本陣の當主吉左衛門と、年寄役の金兵衛とはこの村に生れた。吉左衛門は青山の家をつぎ、金兵衛は、小竹の家をついだ。この人達が宿役人として、驛路一切の世話に慣れた頃は、二人ともすでに五十の坂を越してゐた。吉左衛門五十五歳、金兵衛の方は五十七歳にもなつた。これは當時としてめづらしいことでもない。吉左衛門の父にあたる先代の半六などは六十六歳まで宿役人を勤めた。それから家督を譲つて、漸く隠居したくらゐの人だ。吉左衛門にはすでに半藏といふ跡繼がある。しかし家督を譲つて隠居しようなどとは考へてゐない。福島^{ふくしま}の役所からでもその沙汰があつて、いよいよ引退の時期が来るまでは、まだ／＼勤められるだけ勤めようとしてゐる。金兵衛とても、この人に負けてはゐなかつた。

二

山里へは春の來ることも遅い。毎年舊曆の三月に、惠那山脈の雪も溶けはじめる頃になると、にはかに人の往來も多い。中津川の商人は奥筋(三留野、上松、福島から奈良井邊までを指す)への諸勘定を兼ねて、ぼつ／＼隣の國から登つて來る。伊那の谷の方からは飯田の在(の)ものが祭禮の衣裳などを借りにやつて來る。太神樂も入り込む。伊勢へ、津島へ、金毘羅へ、あるひは善光寺への參詣もその頃から始まつて、それらの團體をつくつて通る旅人の群の動きがこの街道に活氣をそそぎ入れる。

西の領地よりする參觀交代の大小の諸大名、日光への例幣使、大阪の奉行や御加番衆などはこゝを通行した。吉左衛門なり金兵衛なりは他の宿役人を誘ひ合せ、羽織に無刀、扇子をさして、西の宿境までそれらの一行をうや／＼しく出迎へる。そして東は陣場か、峠の上まで見送る。宿から宿への繼立てと言へば、人足や馬の世話から荷物の扱ひまで、一通行ある毎に宿役人としての心づかひもかなり多い。多人數の宿泊、もしくは御小休の用意も忘れてはならなかつた。水戸の御茶壺、公儀の御鷹方をも、こんな風にして迎へる。しかしそれらは普通の場合である。村方の財政や山林田地のことなどに干渉されないで済む通行である。福島勘定所の奉行を迎へるとか、木曾山一帯を支配する尾張藩の材木方を迎へるとかいふ日になると、たゞの送り迎へや繼立てだけではなか／＼濟まされな

かつた。

多感な光景が街道に展(ひら)けることもある。文政九年の十二月に、黒川村の百姓が牢舎御免といふことで、美濃境まで追放を命ぜられたことがある。二十二人の人數が宿籠で、朝の五つ時に馬籠へ着いた。師走ももう年の暮に近い冬の日だ。その時も、吉左衛門は金兵衛と一緒に雪の中を奔走して、村の二軒の旅籠屋で晝支度をさせるから國境へ見送るまでの世話をした。尤も、福島からは四人の足輕が附添つて來たが、二十二人共に残らず腰繩手錠であつた。

五十餘年の生涯の中で、この吉左衛門等が記憶に残る大通行と言へば、尾張藩主の遺骸がこの街道を通つた時のことにとゞめをさす。藩主は江戸で亡くなつて、その領地にあたる木曾谷を輿で運ばれて行つた。福島の前代官、山村氏から言へば、木曾谷中の行政上の支配權だけをこの名古屋の大領主から託されてゐるわけだ。吉左衛門等は二人の主人をいたゞいてゐることになるので、名古屋城の藩主を尾州の殿様と呼び、その配下にある山村氏を福島の前代官と呼んで、「殿様」と「旦那様」で區別してゐた。

「あれは天保十年のことでした。全く、あの時の御通行は前代未聞でしたわい。」この金兵衛の話が出る度に、吉左衛門は日頃からの「本陣鼻」と言はれるほど大きく肉厚な鼻の先へ皺をよせる。そして、「また金兵衛さんの前代未聞が出た」と言はないばかりに、年齢の割合にはつや／＼とした色の白い相手の顔を眺める。しかし金兵衛の言ふ通り、あの時の大

通行は全く文字通り前代未聞の事と言つてよかつた。同勢およそ千六百七十人ほどの人數がこの宿に溢れた。問屋の九太夫、年寄役の儀助、同役の新七、同じく與次衛門、これらの宿役人仲間から組頭のものはおろか、ほとんど村中總掛りで事に當つた。木曾谷中から寄せた七百三十人の人足だけでは、まだそれでも手が足りなくて、千人あまりもの伊那の助郷が出たのもあつた。諸方から集めた馬の數は二百二十四にも上つた。吉左衛門の家は村でも一番大きい本陣のことだから言ふ迄もないが、金兵衛の住居にすら二人の御用人の外に上下合せて八十人の人數を泊め、馬も二匹引受けた。

木曾は谷の中が狭くて、田畑もすくない。限りのある米でこの多人數の通行をどうすることも出来ない。伊那の谷からの通路にあたる權兵衛街道の方には、馬の振る鈴音に調子を合せるやうな馬子唄が起つて、米をつけた馬匹の群がこの木曾街道に續くのも、さういふ時だ。

三

山の中の深さを思はせるやうなものが、この村の周圍には數知れずあつた。林には鹿も住んでゐた。あの用心深い獸は村の東南を流れる細い下坂川について、よくそこへ水を飲みに降りて來た。

古い歴史のある御坂越をも、こゝから惠那山脈の方に望むことが出来る。大寶の昔に初めて開かれた木曾路とは、實はその御坂を越えたものであるといふ。その御坂越から幾つかの谷を

隔てた惠那山の裾の方には、霧が原の高原もひらけてゐて、そこにはまた古代の牧場の跡が遠くかすかに光つてゐる。

この山の中だ。時には荒くれた猪が人家の並ぶ街道にまで飛び出す。鹽澤といふところから出て来た猪は、宿はづれの陣場から藥師堂の前を通り、それから村の舞臺の方をあれば廻つて、馬場へ突進したことがある。それ猪だと言つて、皆々鐵砲などを持出して騒いだが、日暮になつてその行方も分らなかつた。この勢のいゝ獸に比べると、向山から鹿の飛び出した時は、石屋の坂の方へ行き、七廻りの藪へ這入つた。大勢の村の人が集まつて、到頭一矢でその鹿を射とめた。ところが隣村の湯舟澤の方から抗議が出て、しまひには口論にまでなつたことがある。「鹿よりも、喧嘩の方がよっぽど面白かつた。」と吉左衛門は金兵衛に言つて見せて笑つた。何かといふと二人は村のことに引張り出されるが、そんな喧嘩は取り合はなかつた。

檜木、樺、明檜、高野槇、樺——これを木會では五木といふ。さういふ樹木の生長する森林の方は殊に山も深い。この地方には巢山、留山、明山の區別があつて、巢山と留山とは絶対に村民の立ち入ることを許されない森林地帯であり、明山のみが自由林とされてゐた。その明山でも、五木ばかりは許可なしに伐採することを禁じられてゐた。これは森林保護の精神より出たことは明かで、木會山を管理する尾張藩がそれほどこの地方から生れて来る良い材木を重く視てゐたのである。取締りはやかましい。すこしの怠

りでもあると、木會谷中三十三ヶ村の庄屋は上松の陣屋へ呼び出される。吉左衛門の家は代々本陣庄屋間屋の三役を兼ねたから、その度に庄屋として、背伐りの嚴禁を犯した村民のため言ひ開きをしなければならなかつた。どうして檜木一本でも馬鹿にならない。陣屋の役人の目には、どうかすると人間の生命よりも重かつた。「昔はこの木會山の木一本伐ると、首一つなかつたものだぞ。」

陣屋の役人の威し文句だ。

この役人が吟味のために村へ入り込むといふ噂でも傳はると、猪や鹿どころの騒ぎでなかつた。あわてて不用の材木を焼き捨てるものがある。圍つて置いた檜板を他へ移すものがある。多分の木を盗んで置いて、板にへいだり、賣捌いたりした村の人などは殊に狼狽する。背伐りの吟味と言へば、村中家探しの評判が立つほど嚴重を極めたものだ。

目證の彌平はもう長いこと村に滞在して、幕府時代の卑い「おかつびき」の役目をつとめてゐた。彌平の案内で、福島役所からの役人を迎へた日のことは、一生忘れられない出来事の一つとして、まだ吉左衛門の記憶には新しくある。その吟味は本陣の家の門内で行はれた。のみならず、そんなに澤山な怪我人を出したことも、村の歴史として會て聞かなかつたことだ。前庭の上段には、福島から来た役人の年寄、用人、書役などが居並んで、その側には足輕が四人も控へた。それから村中のものが呼び出された。その科によつて腰繩手錠で宿役人の中へ預

けられることになつた。尤も、老年で七十歳以上のものは手錠を免ぜられ、すでに死亡したものは「お叱り」といふだけにとどめて特別な憐憫を加へられた。

この光景を覗き見ようとして、庭の隅の梨の木のかげに隠れてゐたものもある。その中に吉左衛門が悴の半藏もある。當時十八歳の半藏は、眼を据えて、役人のすることや、腰繩につながられた村の人達のさまを見てゐる。それに吉左衛門は氣がついて、

「さあ、行つた、行つた——こゝはお前達なぞの立つてるところぢやない。」と叱つた。

六十一人もの村民が宿役人へ預けられることになつたのも、その時だ。その中の十人は金兵衛が預かつた。馬籠の宿役人や組頭としてこれが見てゐられるものでもない。福島役人達が湯舟澤村の方へ引き揚げて行つた後で、「お叱り」のものの赦免せられるやうにと、不幸な村民のために一同お日待をつとめた。その時のお札は一枚づつ村中へ配當した。

この出来事があつてから二十日ばかり過ぎに、「お叱り」のものの残らず手錠を免ぜられる日が漸く来た。福島からは三人の役人が出張してそれを傳へた。

手錠を解かれた小前のものの一人は、役人の前に進み出て、おづ／＼とした調子で言つた。「畏れながら申し上げます。木會は御承知の通りな山の中で御座います。こんな田畑もすくないやうな土地で御座います。お役人様の前です

が、山の林にでも縋るより外に、わたくしども
の立つ瀬は御座いません。」

四

新茶屋に、馬籠の宿の一番西のはづれのところ、その路傍に芭蕉の句塚の建てられた頃は、何と言つても徳川の代はまだ平和であつた。

木曾路の入口に新しい名所を一つ造る、信濃と美濃の國境にあたる一里塚に近い位置を撰んで街道を往來する旅人の眼にもよくつくやうな緩やかな丘の裾に翁塚を建てる、山石や躑躅や蘭などを運んで行つて周圍に休息の思ひを興へる、土を盛りあげた塚の上に翁の句碑を置く——その楽しい考へが、日頃俳諧などに遊ぶと聞いたこともない金兵衛の胸に浮んだといふことは、

それだけでも吉左衛門を驚かした。さういふ吉左衛門はいくらか風雅の道に嗜みもあつて、本陣や庄屋の仕事のかたはら、美濃派の俳諧の流れを酌んだ句作に耽ることもあつたからで、

あれほど山里に住む心地を引き出されたことも、吉左衛門等にはめづらしかつた。金兵衛はまた石屋に渡した仕事もほど出来たと言つて、その都度句碑の工事を見に吉左衛門を誘つた。二人とも山家風な輕衫（地方により、もんべいといふもの）をはいて出掛けたものだ。

「親父も俳諧は好きでした。自分の生きてるうちに翁塚の一つも建てて置きたいと、口癖のやうにさう言つてゐました。まあ、あの親父の供養にと思つて、わたしもこんなことを思ひ立ちましたよ。」

さう言つて見える金兵衛の案内で、吉左衛門も工作された石の側に寄つて見た。碑の表面には、左の文字が讀まれた。

送られつ送りつ果は木曾の秋 はせを

「これは達者に書いてある。」

「でも、この秋といふ字がわたしはすこし氣に入らん。禾へんが崩して書いてあつて、それにつくりが龜でせう。」

「かういふ書き方もありますサ。」

「どうもこれでは木曾の蠅としか讀めない。」

こんな話の出たのも、一昔前だ。

あれは天保十四年にあたる。所謂天保の改革の頃で、世の中建て直しといふことがしきりに觸れ出される。村方一切の諸帳簿の取調べが始まる。福島役所からは公役、普請役が上つて来る。尾張藩の寺社奉行、又は材木方の通行も續く。馬籠の荒町にある村社の鳥居のために檜木を背伐りしたと言つて、その始末書を取られるやうな細い干渉がやつて来る。村民の使用する煙草入、紙入から、女のかんざしまで、およそ銀といふ銀を用ひた類のものは、すべて引き上げられ、封印をつけられ、目方まで改められて、庄屋預けといふことになる。それほど政治はこまかくなつて、句碑一つもうつかり建てられないやうな時世ではあつたが、まだ——それでも社會にゆとりがあつた。

翁塚の供養はその年の四月のはじめに行はれた。生憎と曇つた日で、八つ半時より雨も降り出した。招きを受けた客は、おもに美濃の連中で、手土産も田舎らしく、扇子に羊羹を添へて来るもの、生椎茸を提げて来るもの、先代の好きな菓子を佛前へと言つてわざ／＼玉あられ一箱用意して来るもの、それらの人達が金兵衛方へ集まつて見た時は、國も二つ、言葉の訛りもまた二つに入れまじつた。その中には、峠一つ降りたところに住む隣宿落合の宗匠、崇佐坊も招かれて來た。この人の世話で、美濃派の俳席らしい支考の「三瓶の圖」などの壁に懸けられたところで、やがて連中の附合があつた。

主人役の金兵衛は、自分で五十韻、乃至百韻の仲間入は出来ないまでも、

「これで、さぞ親父も悦びませうよ。」

と言つて、辨當に酒さかななど重詰にして出し、招いた人達の間を輪旋した。

その日は新たに出來た塚のもとに一同集まつて、そこで吟聲供養を済ます筈であつた。ところが、記念の一巻を巻き終るのに日暮方まで掛つて、吟聲は金兵衛の宅で済ました。供養の式だけを新茶屋の方で行つた。

昔氣質の金兵衛は亡父の形見だと言つて、その日の宗匠崇佐坊へ茶縹の綿入羽織などを贈るために、わざ／＼自分で落合まで出掛けて行く人である。

吉左衛門は金兵衛に言つた。

「やつぱり君はわたしの好い友達だ。」

五

暑い夏が來た。舊曆五月の日のあたつた街道

を踏んで、伊那の方面まで薩買にと出掛ける中津川の商人も通る。その草いきれのするあつい空気の、上り下りの諸大名の通行もある。月の末には毎年福島の方に立つ毛附け（馬市）も近づき、各村の駒改めといふことも新たに開始された。當時幕府に勢力のある彦根の藩主（井伊掃部頭）も、久しぶりの歸國と見え、須原宿泊り、妻籠宿晝食、馬籠は御小休みで、木曾路を通つた。

六月に入つて見ると、うち續いた快晴で、日に増し照りも強く、村中で雨乞でも始めなければならぬほどの激しい暑氣になつた。荒町の部落ではすでにそれを始めた。

丁度、峠の上の方から馬をひいて街道を降りて来る村の小前（のち）のものがある。福島（のち）の馬市からの戻り（のち）と見えて、青毛の親馬の外に、當才らしい一匹の子馬をもその後に連れてゐる。氣の短い問屋の九太夫がそれを見つけて、嘔鳴つた。

「おい、どこへ行つてゐたんだい。」

「馬買ひよなし。」

「この早りを知らんのか。お前の留守に、田圃は乾いてしまふ。荒町あたりぢや梵天山へ登つて、雨乞を始めてゐる。氏神さまへ行つて御覽、お千度参りの騒ぎだ。」

「さう言はれると、一言もない。」

「さあ、このお天氣續きでは、伊勢木を出さずに済むまいぞ。」

伊勢木とは、伊勢太神宮へ祈願を籠めるための神木を指す。かうした深い山の中に古くから行はれる雨乞の習慣である。よく／＼の年でな

ければこの伊勢木を引き出すといふこともなかつた。

六月の六日、村民一同は鎌止めを申し合せ、荒町にある氏神の境内に集まつた。本陣、問屋をはじめ、宿役人から組頭まで残らずそこに参集して、氏神境内の宮林から樅の木一本を元伐りにする相談をした。

「一本ぢや、伊勢木も足りまい。」

と吉左衛門が言ひ出すと、金兵衛はすかさず答へた。

「や、そいつはわたしに寄附させて貰ひませう。ちやうど好い樅が一本、吾家の林にもありますから。」

元伐りにした二本の樅には注連なぞが掛けられて、その前で禰宜の祈禱があつた。この清浄な神木が日暮方になつて漸く鳥居の前に引き出されると、左右に分れた村民は聲を揚げ、太い綱でそれを引き合ひはじめた。

「よいよ。よいよ。」

互ひに競ひ合ふ村の人達の聲は、荒町のはづれから馬籠の中央にある高札場あたりまで響けた。かうなると、庄屋としての吉左衛門も骨が折れる。金兵衛は自分から進んで神木の樅を寄附した關係もあり、夕飯の支度もそこ／＼にまた馬籠の町内のもをを引き連れて行つて見ると、伊勢木はずつと新茶屋の方まで荒町の百姓の力に引かれて行く。それを取り戻さうとして、三つや表から疊石の邊で双方の揉み合ひが始まる。到頭その晩は伊勢木を荒町に止めて置いて、一同疲れて家に歸つた頃は一番鶉が鳴いた。

「どうもことしは年廻りがよくない。」

「さう言へば、正月のはじめから不思議なこともありましたよ。正月の三日の晩です、この山の東の方から光つたものが出て、それが西南の方角へ飛んだと言ひます。見たものは皆驚いたさうですよ。馬籠ばかりぢやない、妻籠でも、山口でも、中津川でも見たものがある。」

吉左衛門と金兵衛とは二人でこんな話をして、伊勢木の始末をするために、村民の集まつてゐるところへ急いだ。山里に住むものは、すこし變つたことでも見たり聞いたりすると、直ぐそれを何かの暗示に結びつけた。

三日がかりで村中のものが引き合つた伊勢木を落合川の方へ流した後になつても、まだ御利生は見えなかつた。峠のものは熊野大權現に、荒町のものは愛宕山に、いづれも百八の松明をとぼして、思ひ／＼の祈願を籠める。宿内では二組に分れてのお日待も始まる。雨乞の祈禱、それに水の拜借と言つて、村から諏訪大社へ二人の代参までも送つた。神前へのお初穂料として金百疋、道中の路用として一人につき一分二朱づつ、百六十軒の村中のものが十九文づつ出し合つてそれを分擔した。

東海道浦賀の宿、久里が濱の沖合に、黒船のおびたゞしく現はれたといふ噂が傳はつて來たのも、村ではこの雨乞の最中である。

問屋の九太夫が先づそれを彦根の早飛脚から聞きつけて、吉左衛門にも告げ、金兵衛にも告げた。その黒船の現はれたため、にはかに彦根

の藩主は幕府から現場の詰役を命ぜられたとのこと。

嘉永六年六月十日の晩で、ちやうど諏訪大社からの二人の代参が村をさして大急ぎに歸つて来た頃は、その乾き切つた夜の空氣の中を彦根の使者が西へ急いだ。江戸からの便りは、中仙道を経て、この山の中へ届くまでに、早飛脚でも相應日数はかかる。黒船とか、唐人船とかがおびたゞしくあの沖合にあらはれたといふこと以外に、委しいことは誰にも分らない。まして亞米利加の水師提督ペリイが四艘の軍艦を率ゐて、初めて日本に到着したなどとは、知りやうもない。

「江戸は大變だといふことですよ。」

金兵衛はたゞそれだけを吉左衛門の耳にさゝやいた。

第一章

七月に入つて、吉左衛門は木曾福島の用事を済まして出張先から引取つて来た。その用向きは、前の年の秋に、福島勘定所から依頼のあつた仕法立ての件で、馬籠の宿としては金百兩の調達を引き請け、暮に五十兩の無盡を取り立ててその金は福島の方へ廻し、二番口も敷金にして、首尾よく無盡も終會になつたところで、都合全部の上納を終つたことを届けて置いてあつた。今度、福島からその挨拶があつたのだ。

金兵衛は待兼ね顔に、無事で歸つて来たこの吉左衛門を自分の家の店座敷に迎へた。金兵衛の家は伏見屋と言つて、造り酒屋をしてゐる。街道に添うた軒先に杉の葉の圓く束にしたのを掛け、それを清酒の看板に代へてあるやうなところだ。店座敷も廣い。その時、吉左衛門は福島から受取つて来たものを風呂敷包の中から取出して、

「さあ、これだ。」

と金兵衛の前に置いた。村の宿役人仲間へ料紙一束づつ、無盡の加入者一同への酒肴料、まだその外に、二巾の縮緬の風呂敷が二枚あつた。それは金兵衛と耕田屋の儀助の二人が特に多くの金高を引受けたといふので、その挨拶の意味のものだ。

吉左衛門の報告はそれだけに留まらなかつた。最後に、一通の書付をもそこへ取出して見せた。

「其方儀、御勝手御仕法立てに就き、頼母子講御世話方格別に存じ入り、小前の諭し方も行届き、その上、自身にも別段御奉公申し上げ、奇特の事に候。依て、一代苗字帶刀御免なし下され候。その心得あるべきもの也。」

嘉永六年丑六月

青山吉左衛門殿

石逸之丞
白萩大左衛門
新五左衛門

「ホ。苗字帶刀御免とありますね。」
「まあ、そんなことが書いてある。」
「吉左衛門さん一代限りともありますね。なんにしても、これは名譽だ。」
と金兵衛が言ふと、吉左衛門はすこし苦い顔をして、

「これが、せめて十年前だとねえ。」

兎も角も吉左衛門は役目を果したが、同時に勘定所の役人達がいやな臭氣をも嗅いで歸つて来た。苗字帶刀を勘定所の遺練算段に替へられることは、吉左衛門としてあまり好い心持はしなかつた。

「金兵衛さん、君には察して貰へるでせうが、庄屋のつとめも辛いものだと思つて來ましたよ。」

吉左衛門の述懐だ。

その時、上の伏見屋の仙十郎が顔を出したので、しばらく二人はこんな話を打ち切つた。仙十郎は金兵衛の仕事を手傳はされてゐるので、ちよつと用事の打合せに來た。金兵衛を叔父と呼び、吉左衛門を義理ある父としてゐるこの仙十郎は伏見家から分家して、別に上の伏見屋といふ家を持つてゐる。年も半藏より三つほど上で、腰にした煙草入の根附にまで新しい時の流行を見せたやうな若者だ。

「仙十郎、お前も茶でも飲んで行かないか。」

と金兵衛が言つたが、仙十郎は吉左衛門の前に出ると妙に改まつてしまつて、茶も飲まなかつた。何か氣づまりな、ちつとしてゐられないやうな風で、やがてそこを出て行つた。

吉左衛門は見送りながら、
「みんなどういふ人に成つて行きますかさ——
仙十郎にしても、半蔵にしても。」

若者への關心にかけては、金兵衛とても吉左衛門に劣らない。亞米利加のペリイ來訪以來のあつたゞしさはおろか、それ以前からの周囲の空氣の中にあるものは、若者の目や耳から隠したいことばかりであつた。殺人、盜賊、駈落、男女の情死、諸役人の腐敗沙汰などは、この街道でめづらしいことではなくなつた。

同宿三十年——何と言つても吉左衛門と金兵衛とは、その同じ驛路の記憶につながれてゐた。この二人に言はせると、日頃上に立つ人達からやかましく督促せらるゝことは、街道の好い整理である。言葉をかへて言へば、封建社會の「秩序」である。しかしこの「秩序」を亂さうとするものも、さういふ上に立つ人達からであつた。博打は以ての外だといふ。しかし毎年の毛附け（馬市）を賭博場に公開して、土地の繁華を計つてゐるのも福島役人であつた。袖の下は以ての外だといふ。しかし御着代もしくは御祝儀何兩かの獻上金を納めさせることなしに、會てこの街道を通行したためしのないのも日光への例幣使であつた。人殺しは以ての外だといふ。しかし八澤の長坂の路傍にあたるところで口論の末から土佐の家中の一人を殺害し、その仲裁に入つた一人の親指を切り落し、この街道で刃傷の手本を示したのも小池伊勢の家中であつた。女は手形なしには關所をも通さないといふ。しかし木曾路を通る毎に女の乗物を用意さ

せ、見る人が見ればそれが正式な夫人のものでないのも彦根の殿様であつた。

「あゝ」と吉左衛門は嘆息して、「世の中はどう成つて行くかと思ふやうだ。あの御勘定所の御役人などが御殿様からの御言葉だなんて、獻金の世話を頼みに出張して來て、吾家の床柱の前にでも坐り込まれると、わたしは又かと思ふしかし、金兵衛さん、その御役人の行つてしまつた後では、わたしはどんな無理なことでも聞かなくちや成らないやうな氣がする……」

東海道浦賀の方に黒船の着いたといふ噂を耳にした時、最初吉左衛門や金兵衛はそれほどにも思はなかつた。江戸は大變だといふことであつても、そんな騒ぎは今に止むだらうぐらゐに二人とも考へてゐた。江戸から八十三里の餘も隔たつた木曾の山の中に住んで、鎖國以來の長い眠りを眠りつゞけて來たものは、亞米利加のやうな異國の存在すら初めて知るくらゐの時だ。この街道に傳はる噂の多くは、謠にもあるやうに轉がる度に大きな塊になる雪達磨に似てゐる。六月十日の晩に、彦根の早飛脚が残して置いて行つた噂もそれで、十四日には黒船八十六艘もの信じがたいやうな大きな話になつて傳はつて來た。寛永十年以來、日本國の一切の船は海の外に出ることを禁じられ、五百石以上の大船を造ることも禁じられ、阿蘭陀、支那、朝鮮をのぞくの外は外國船の來航をも堅く禁じてゐる。その國のおきてを無視して、故意にもそれを破らうとするものが幕地にあの江戸灣を望ん

で直進して來た。當時幕府が船改めの番所は下田の港から浦賀の方に移してある。そんな番所の所在地まで知つて、あの唐人船がやつて來たことすら、すでに不思議の一つであると言はれた。

種々な流言が傳はつて來た。宿役人としての吉左衛門等はそのような流言からも村民を護らねばならなかつた。やがて通行の前觸だ。間もなくこの街道では江戸出府の尾張の家中を迎へた。尾張藩主（徳川慶勝）の名代、成瀬隼人之正、その家中のおびたゞしい通行の後には、かねて待ち受けてゐた彦根の家中も追々やつて來る。公儀の御茶壺同様にとの特別扱ひの御觸れがあつて、名古屋城からの具足長持が十棹もその後から續いた。それらの警護の武士が美濃路から借りて連れて來た人足だけでも、百五十人に上つた。繼立ても難澁であつた。馬籠の宿場としては、山口村からの二十人の加勢しか得られなかつた。例の黒船はやがて残らず歸つて行つたとやらで、江戸表へ出張の人達は途中から引き返して來るものがある。ある朝馬籠から送り出した長持は隣宿の妻籠で行き止まり、翌朝中津川から來た長持は馬籠の本陣の前で立往生する。荷物はそれ／＼問屋預けといふことになつたが、人馬繼立ての見分として奉行まで出張して來るほど街道はごた／＼した。

狼狽そのもののやうなこの混雜が靜まつたのは、半月程前にあたる。浦賀へ押し寄せて來た唐人船も行衛知れずになつて、先づ／＼恐惶だ。そんな報知が、江戸方面からは追々と傳はつて

来た頃だ。

吉左衛門は金兵衛を相手に、伏見屋の店座敷で話し込んでゐると、ちやうどそこへ警護の武士を先に立てた尾張の家中の一隊が西から街道を進んで来た。吉左衛門と金兵衛とは談話半ばに伏見屋を出て、この一隊を迎へるために他の宿役人等とも一緒になつた。尾張の家中は江戸の方へ大筒の鐵砲を運ぶ途中で、馬籠の宿の片側に來て足を休めて行くところであつた。本陣や問屋の前あたりは檜木笠や六尺棒などで埋められた。騎馬から降りて休息する武士もあつた。肌脱ぎになつて背中に流れる汗をふく人足達もあつた。よくあの重いものを擔ぎ上げて、美濃境の十曲峠を越えることが出来たと、人々はその話で持ち切つた。吉左衛門はじめ、金兵衛等はこの勞苦をねぎらひ、問屋の九太夫はまた枡田屋の儀助等と共にその間を奔り廻つて、隣宿妻籠までの繼立てのことを斡旋した。

村の人達は皆、街道に出て見た。その中に半藏もゐた。彼は父の吉左衛門に似て背も高く、青々とした月代も男らしく眼につく若者である。ちやうど暑さの見舞に村へ來てゐた中津川の醫者と連立つて、通行の邪魔にならないところに立つた。この醫者が宮川寛齋だ。半藏の舊い師匠だ。その時、半藏は無言。寛齋も無言で、ただ醫者らしく頭を圓めた寛齋の胸のあたりに、手にした扇だけが僅かに動いてゐた。

「半藏さん。」

上の伏見屋の仙十郎もそこへ來て、考へ深い眼付をしてゐる半藏の側に立つた。目方百十五

六貫ばかりの大筒の鐵砲、この人足二十二人掛り、それに七人掛りから十人掛りまでの大筒五挺、都合六挺が、やがて村の人々の眼の前を動いて行つた。こんなに諸藩から江戸の邸へ向けて大砲を運ぶことも、その日までなかつたことだ。

間もなく尾張の家中衆は見えなかつた。しかし、不思議な沈黙が残つた。その沈黙は、何が江戸の方に起つてゐるか知れないやうな、そんな心持を深い山の中にゐるものに起させた。六月以來頻繁な諸大名の通行で、江戸へ向けてこの木曾街道を経由するものに、黒船騒ぎに關係のないものはなかつたからで。あるものは江戸灣一帯の海岸の防備、あるものは江戸城下の警固のためであつたからで。

金兵衛は吉左衛門の袖を引いて言つた。

「いや、お歸り早々、いろ／＼お骨折で。まあ、お蔭でお繼立ても済みました。今夜は御苦勞呼びといふほどでもありませんが、お玉のやつに支度させて置きます。後でお出を願ひませう。そのかはり、吉左衛門さん、御馳走は何もありませんよ。」

酒のさかな。胡瓜もみに青紫蘇。枝豆。到來物の疊みいわし。それに茄子の新漬。飯の時にとろ／＼汁。すべてお玉の手料理の物で、金兵衛は夕飯に吉左衛門を招いた。

店座敷も暑苦しいからと、二階を明けひろげて、お玉はそこへ二人の席を設けた。山家風な風呂の用意もお玉の心づくしであつた。招かれ

て行つた吉左衛門は、一風呂よばれた後のさつぱりとした心持で、廣い爐邊の片隅から二階への箱梯子を登つた。黒光りのするほどよく拭き込んであるその箱梯子も伏見屋らしいものだ。西向きの二階の部屋には、金兵衛が先代の遺物と見えて、美濃派の俳人等の寄せ書が灰汁掛けのした表装にして壁に掛けてある。八人のものが集まつて馬籠風景の八つの眺めを思ひ／＼の句と畫の中に取り入れたものである。この俳味のある掛物の前に行つて立つことも、吉左衛門をよろこばせた。

夕飯。お玉は膳を運んで來た。ほんの有り合せの手料理ながら、青みのある新しい野菜で膳の上を涼しく見せてある。やがて酒もはじまつた。

「吉左衛門さん、何もありませんが召上つて下さいな。」とお玉が言つた。「吾家の鶴松も出まして、お世話までございます。」

「さあ、一杯やつて下さい。」と言つて、金兵衛はお玉を顧みて、「吉左衛門さんはお前、苗字帯刀御免といふことになつたんだよ。今迄の吉左衛門さんとは違ふよ。」

「それはお目出度うございます。」

「いえ。」と吉左衛門は頭をかがいて、「苗字帯刀も斯う安實の時世になつて來ては、それほどありがたくもありません。」

「でも、悪い氣持はしないでせう。」と金兵衛は言つた。「一本さして、青山吉左衛門で通る。」

「まあ、さう言はないで呉れたまへ。それより

か、盃でも頂かうぢやありませんか。」

吉左衛門も酒はいける口であり、それに勧め上手なお玉のお酌で、金兵衛とさしむかひに盃を重ねた。その二階は、曾て翁塚の供養のあつた折に、落合の宗匠崇佐坊まで集まつて、金兵衛が先代の記念のために俳席を開いたところだ。さう言へば、吉左衛門や金兵衛の舊馴染で最早この世にゐない人も多い。馬籠の生れで水墨の山水や花果などを得意にした畫家の蘭溪もその一人だ。あの蘭溪も、黒船騒ぎなどは知らずに亡くなつた。

「お玉さんの前ですが。」と吉左衛門は言つた。「かうして御酒でも頂くと、實に一切を忘れますよ。わたしはよく思ひ出す。金兵衛さん、ほら、あのアトリ(鴛子鳥)三十羽に、茶漬三杯——」

「それさ。」と金兵衛も思ひ出したやうに、「わたしも今それを言はうと思つてゐたところさ。」

アトリ三十羽に、茶漬三杯。あれは嘉永二年にあたる。山里では小鳥のおびたゞしく捕れた年で、殊に大平村の方では毎日三千羽づつものアトリが驚くほど鳥網にかゝると言はれ、この馬籠の宿までたび／＼賣りに来るものがあつた。小鳥の名所として土地のものが誇る木曾の山の中でも、あんな年はめつたにあるものでなかつた。仲間ものが集まつて、一興を催すことにしたのもその時だ。そのアトリ三十羽に、茶漬三杯食へば、褒美として別に三十羽貰へる。もし又、その三十羽と茶漬三杯食へなかつた時は、あべこべに六十羽差出さなければならぬとい

ふ約束だ。場處は蓬萊屋。時刻は七つ時。食ひ手は吉左衛門と金兵衛の二人。食はせる方のものは組頭笹屋の庄兵衛と小笹屋の勝七。それに勝負を見届けるものもなくしてはならぬ。蓬萊屋の新七がその審判官を引受けた。さて、食つた。約束の通り、一人で三十羽、茶漬三杯、残らず食ひ終つて、褒美の三十羽づつは吉左衛門と金兵衛とで貰つた。アトリは形もちひさく、骨も柔く、鶉のやうな小鳥とは譯が違ふ。それでもなか／＼食ひではあつたが、二人とも腹もはらないで、その足で會所の店座敷へ押し掛けて澤山茶を飲んだ。その時の二人の年齢もまた忘れられずにある。吉左衛門は五十一歳、金兵衛は五十三歳を迎へた頃であつた。二人はそれほど盛んな食慾を競ひ合つたものだ。

「あんな面白いことはなかつた。」
「いや、大笑ひにも、なんにも。あんな面白いことは前代未聞さ。」

「出ましたね、金兵衛さんの前代未聞が——」
こんな話も酒の上を楽しくした。隣人同志でもあり、宿役人同志でもある二人の友達は、しばらく街道から離れる思ひで、盡きない夜咄と、とろ／＼汗に、夏の夜のふけ易いことも忘れてゐた。

馬籠の宿で初めて酒を造つたのは、伏見屋でなくて、榊田屋であつた。その初代と二代目の主人、惣右衛門親子のものであつた。榊田屋の親子が協力して水の量を計つたところ、下坂川で四百六十目、榊田屋の井戸で四百八十目、

伏見屋の井戸で四百九十目あつたといふ。その中で下坂川の水を汲んで、惣右衛門親子は初めて造り酒の試みに成功した。馬籠の水でも良い酒の出来ることを實際に示したのも親子二人のものであつた。それまで馬籠には造り酒屋といふものはなかつた。

この惣右衛門親子は、村の百姓の中から身を起して無遠慮に頭を持ち上げた人達であるばかりでなく、後の金兵衛等のためにも好かれ悪しかれ一つの進路を切り開いた最初の人達である。榊田屋の初代が伏見屋から一軒置いて上隣りの街道に添うた位置に大きな家を新築したのは、寶曆七年の昔で、その頃に初代が六十五歳、二代目が二十五歳であつた。親代々からの百姓であつた初代惣右衛門が本家の梅屋から分れて、別に自分の道を踏み出したのは、それより更に四十年も以前のことにあたる。

馬籠は田畠の間にすら大きくあらはれた石塊を見るやうな地方で、古くから生活も容易でなにとされた山村である。初代惣右衛門はこの村に生れて、十八歳の時から親の名跡を繼ぎ、岩石の間をも厭はず百姓の仕事を勵んだ。本家は代々の年寄役でもあつたので、若輩ながらにその役をも動めた。旅人相手の街道に目をつけて、旅籠屋の新築を思ひ立つたのは、この初代が二十八歳の頃にあたる。その頃の馬籠は、一分か二分の金を借りるにも、隣宿の妻籠が美濃の天津川まで出なければならなかつた。師走も押し詰まつた頃になると、中津川の備前屋の親仁が十日あまり馬籠へ来て泊つてゐて、町中へ小

貸しなどした。その金で漸く村のものが年を越したくらゐの土地柄であつた。

四人の子供を控へた初代惣右衛門夫婦の小歴史は、馬籠のやうな困窮な村にあつて激しい生活苦と闘つた人達の歴史である。百姓の仕事とする朝草も、春先青草を見かける時分から九月十月の霜をつかむまで毎朝二度づつは刈り、晝は人並に會所の役を勤め、晩は宿泊の旅人を第一にして、その間に少しづつの米商ひもした。かみさんはまたかみさんで、内職に豆腐屋をして、三四人の幼いものを控へながら夜通し石臼をひいた。新宅の旅籠屋も出来あがる頃は、普請の折に出た木の片を燈して、それを油火に替へ、夜番の行燈を軒先へかゝげるにも毎朝夜明け前に下掃除を済まし、同じ布で戸障子の敷居などを拭いたのも、そのかみさんだ。貧しさに居る夫婦二人のものは、自分の子供等を路頭に立たせまいとの願ひから、夜一夜ろく／＼安氣に眠つたこともなかつたほど働いた。

その頃、本家の梅屋では隣村湯舟澤から来る人足達の宿をしてゐた。その縁故から、初代夫婦は馴染の人足に頼んで、春先の食米三斗づつ内證で借りうけ、秋米で四斗づつ返すことにしてゐた。これは田地を仕付けるにも、旅籠屋片手間では芝草の用意もなりかねるところから、麥で少しづつ刈り造ることに生活の方法を改めたからで。

初代惣右衛門はこんなところから出發した。旅籠屋の營業と、そして骨の折れる耕作と。もともと馬籠には他に好い旅籠屋もなかつたから、

新宅と言つて泊る旅人も多く、追々と常得意の客もつき、小女まで置き、その奉公人の給金も三分がものは翌年は一兩に増してやれるほどに成つた。飯米一升買の時代の後には、一俵買の時代も來、後には馬で中津川から呼ぶ時代も來た。新宅耕田屋の主人は最早たゞの百姓でもなかつた。旅籠屋營業の外に少しづつ商賣などもする町人であつた。

二代目惣右衛門はこの夫婦の末子として生れた。親から仕來つた百姓は百姓として、惣領にはまだ家の仕事を繼ぐ特權もある。次男三男からはそれを望めなかつた。十三四の頃から草刈奉公に出て、末は雲助にでもなるか。末子と生れたものが成人しても、馬追ひか駕籠かきに極つたものとされたほどの時代である。さういふ中で、二代目惣右衛門は親の側にゐて、物心づく頃から草刈奉公にも出されなかつたといふだけでも、親惣右衛門を徳とした。この二代目が又、親の仕事を幾倍かにひろげた。

人も知るやうに、當時の諸大名が農民から収めた年貢米の多くは、大阪の方に輸送されて、金銀に替へられた。大阪は米取引の一大市場であつた。次第に商法も手廣くやる頃の二代目惣右衛門は、大阪の米相場にも無關心ではなかつた人である。彼は又、優に千兩の無盡にも應じたが、それほど實力を積み蓄へた分限者は本會谷中にも彼の外にないと言はれるやうになつた。彼は貧困を征服しようとした親惣右衛門の心を飽くまでも持ちつづけた。誇るべき傳統もなく、さうかと言つて煩はされ易い過去もなかつた。

腕一本で、無造作に進んだ。

天明六年は二代目惣右衛門が五十三歳を迎へた頃である。その頃の彼は、大きな造り酒屋の店に坐つて、自分の子に酒の一番火入などをさせながら、初代在世の頃からの八十年に亙る過去を思ひ出すやうな人であつた。彼は親先祖から譲られた家督財産其他一切のものを天からの預り物と考へよと自分の子に誨へた。彼は金錢を日本の寶の一つと考へよと誨へた。それをみだりに我物と心得て、私用に費さうものなら、いつか「天道」に泄れ聞える時が來るとも誨へた。彼は先代惣右衛門の出發點を忘れさうな子孫の末を心配しながら死んだ。

伏見屋の金兵衛は、この惣右衛門親子の衣鉢を繼いだのである。さういふ金兵衛もまた持ち前の快活さで、家では造り酒屋の外に質屋を兼ね、馬も持ち、田も造り、時には米の賣買にもたづさはり、美濃の久々里あたりの旗本にまで金を貸した。

二人の隣人——吉左衛門と金兵衛とをよく比べて言ふ人に、中津川の宮川寛齋がある。この學問のある田舎醫者に言はせると、馬籠は國境だ、おそらく町人氣質の金兵衛にも、あの惣右衛門親子にも、商才に富む美濃人の血が混り合つてゐるのだらう、そこへ行くと吉左衛門は多分に信濃の百姓である。

吉左衛門が青山の家は馬籠の裏山にある本陣林のやうに古い。木曾谷の西のはづれに初めて馬籠の村を開拓したのも、相州三浦の方から移